岡本潤論

一九七八年二月十六日に詩人岡本潤逝くの知らせを東京から清水清が電話で知らせてきた。その日は所用で僕は飛騨高山に居た。家からの電話でそれを知ったのは二月十七日の夜であった。

冬には珍らしく飛騨高山の空は澄み渡り、はるか北アルプスの連峰が白くくっきりとその山容を現していた。

ついに長い闘病生活の末に他界した岡本潤の生前の風貌が一瞬脳裏をかすめた。戦後を共に歩んで来た同志として、先輩詩人として個人的にもいろいろと世話にもなったひとりとして心から追悼の思いがこみあげてくる。僕が岡本潤と親しくしたのは、それは新日本文学会の運動の中で彼の交友であった。

戦後のドサクサの時期に板橋区弥生町の葛のからんだ家を訪れたりした。その頃は奥さ

吉田欣一

んも健在で、娘の一子さんもどこかに勤めていて、一泊した朝元氣に家を出て行った事など思い出される。僕はその時岡本潤と何を話合ったか記憶もさだかではないが、新日本文学会岐阜支部の創立後の報告をしたように思う。その頃の僕は、今でもそうであるが、反中央的な考えが強くあって、地方でも民主主義的な文学の組織を造ることの急務を感じ、岐阜支部の機関誌『岐阜文学』の発行に全力を入れていた。その頃僕の意見に岡本潤は賛成し励ましてくれていた。話は飛躍するが後年になって新日本文学会が地方支部を廃止することが決った時には、その先峰に岡本潤が立っているのには驚ろいて、その御都合主義に烈しい攻撃の文章や手紙を出したことがあった。労働の中から言うか、毎日働きなから地方で文学をやっている者の努力なんか無

視して通る文学運動とは何であるかと怒りに似たものさえ感じ、それが解る人岡本潤を信頼していただけに、僕の打撃は大きかった。いつも颯爽として肩をそびやかしている人間には一つや二つのアレルギーはあるものである。岡本潤には頑固な意地と言ったものは少なく、野武士的なものでなくて、都会的なサムライであったように思える。

岡本潤と僕とは新日本文学会を中心にした交友であったから、アナキスト岡本潤としてよりもコミニスト岡本潤となつてからで、戦後の彼の仕事と同行した者としてその歩みの試行錯誤のじぐざぐとそれでも少しでも前へ進もうと懸命に生きた時間に、僕にはコミニスト岡本潤への限りない共感となるものがそこにある。

戦後アナキズムからコミニズムに転換した岡本潤について、思想的に敗れた如く指摘する向もあるが、戦中から戦後にかけて岡本潤の内部に何がおこつたかについては岡本潤の自伝の中でも書かれていない。僕はそのことに就いて岡本潤の自伝は一番大切なところが抜け落ちていて、指摘し、そこを書くようにと彼にすすめたことがある。ついにそれは書かれなかった。今僕は改めて岡本潤のコ

ンミニストとしての戦後の苦闘について書いて置きたい。そこには戦後の政治と文学との問題があり、そこで闘った同志として、お互いの弱点も人間としてのつながりも入りまじって、岡本潤を語る人間模様はただに岡本ひとりのごとくなく新日本文学会の歴史とも重なり、日本共産党とも重なり、そこに生きた詩人岡本潤とは何であったか。

そこまで論ずるには僕には荷が重すぎ、いま資料を集めている時間もない。資料と言えば、岡本潤は闘いの中で自らも参加し署名した声明書らは僕にその時々を送ってくれていた。

敗戦直後の記憶としては、いかに食うかと言うことが日々の生活であつて、闇屋をやつたりしていたから大阪から小野十三郎が詩を書けとすすめてくれたりして、伊吹山慕情を書いて送ったりした。また『コスモス』にも書けとすすめられて比較的早い時期に『梓』と言う詩を出したりした。

敗戦直後に書店で『コスモス』を買った時にはそれによる、岡本潤、小野十三郎、金子光晴、秋山清らの名前に親しみを感じたが積極的に近づいて行くと言うことはなかった。僕は日本共産党に入党した。詩の発表は遠

地輝武の編集していた『新日本詩人』で、それはきわめて自然のなりゆきであった。その頃のおぼろな記憶をたどると、日本共産党は獄中十八年の徳田、志賀らが『飢餓線上にさまよう日本人民に訴へる』を出し、米よこせの闘争を開始した。地方でも隠匿物資の突出しが共産党を先頭にはじめていた。また二・一ストの悲愴な伊井弥四郎の演説(ラジオ)を聞き、産別会議による東宝映画の労働争議では出動しなかったのは戦車だけと言われたほどの烈しい労資の対立の中で、労働運動の高揚があり、それらは日本に革命近しを思わせるものがあった。日本労働者のこれら激烈な闘いを眼のあたりに見て、それでなくとも反骨の精神の強い岡本潤が、自伝によると戦時中は映画関係の仕事をやっていたこともあり、その渦中で労働者に接する中で、コミニズムに接近して行くのは、当然のように僕には思える。わずかに自伝の中に書いている『夜の機関車』ごろから、私の詩風もおのずから変つて行つた。戦後の私の思想的転換は、戦争中にひそかに培はれたものといつてもいいと思う。」と言っているが、その思想的転換になる自らの詩風とは何を指すのであろうか。

建てこんだ倉庫
鉄塔
シゲナル
給水タンク
がらんとした貨物置場
置き忘れられたように動かない
貨車のつらなり
それらがひっそりと鳴りをしづめてゐる
真夜中の構内で
機関車の巨きな図體がひとり
冷たく光るレールの上を往つたり戻つたり
している
突如 荒々しく
ばッばッと火焰色の煙を噴きあげ
けだもののももだえでレールを引きずり
やけに汽笛を鳴らしたり
ガターンと貨車に體当りを食はしたり
なかなか腹の蟲がおさまらんとみえる
(夜の機関車)

『罰当りは生きている』頃からみると沈潜して、直情的な「おれら」とは随分違つたものとなつていく。僕の推測によると、戦争中には花田清輝らと『文化組織』によつて、

戦後の新日本文学会の中でも花田清輝との関係は強いものがあつたと思える。そのことは新日本文学の三十周年記念号に病気で入院の執筆ではあるが「近況報告」の中で（その間に、この世を去つていった花田清輝や中野秀人らのことは、戦争中に「文化再出発の会」をやつて、ちよつとアブナイ橋渡しをしたことなどあるだけに、今さらのように思いをあらたにせずにはいられません。先日、佐々木基一さんから「故事新編」を送られ、それを読みながら、また花田君のことをいろいろ思い浮かべました。——戦争中、彼と魯迅について話し合つたことなども昨日のことのように思い出され——と書いている。岡本潤の思想的転換についての社会的政治的文学的の背景をさぐつてみたが意外に戦後の早い時期の詩は、「夜の機関車」の手法を踏襲して今読んでみてもそこに冷静に状況を視つめている岡本潤をみる事が出来る。

今日も私はここへやつて来た。

何が私をここへひきよせるのだろうか。

何が私をここへかりたててくるのだろうか。

えがらつばい風が吹いている。

ロポトキンを中心とした芸術の研究」を出し、郷土農民とも接触して、前とは違つた地味な活動をつづけていた。その萩原恭次郎が一九三八年（昭和十三年）の秋、突如として雑誌「ゼルバン」に発表した「亜細亜に巨人あり」と題する詩を見たとき、これがあの萩原の作品なのか？——とぼくは自分の眼をうたがわずにはいられないほど驚かされた。そして大阪に居た小野十三郎も驚ろいて岡本潤を訪れ二人でどうしてこんな詩を書いたのだろうと話し合うことになるのだがこの自伝は戦後に書かれたものである。この萩原恭次郎の詩について批判するのに岡本潤は最も詩人として大切なものを見過している。戦争中の自分の詩である。

世界地図をみつめてゐると

黒潮はわが胸に高鳴り

大洋は眼前にひろがり

わが少年の日の夢が蘇つてくる

われ海に生き海に死なんと

海軍兵学校を志願し

近視の宣告で空しくやぶれ去つた

わが少年の日の夢が——

万里、波濤を蹴り

今日も晴れまを見せぬ

汚れた布のような空の下の

八方見とおしの焼野原。

瓦礫のごつたがえし。

まくれれたトタン板。

よじれ這う鋼索、電線。

機械の断片。

所在なげに突立っている煙突。

焼けこけた街路樹と電柱。

がらんだのビルの残骸。

まだくすぶっている餘燼。

何が私をここへひきよせるのだろうか。

何が私をここへかりたててくるのだろうか。

運命とは何か。

私は知らぬ。

昨日、今日、明日

進展する激烈な歴史のなかの

一瞬。

凝然と立ち

視ていると、

焦土は忽然と私の視界から消え失せる。

茫々むげんの大葦原のなかに

私はいた。

（消える焦土）

この詩の中に大葦原が出てくるので言うわけではないが、この作品の前後に書かれたものは小野十三郎の詩集「大海辺」の中に出てくる戦後日本の荒廃した都会風景の類似点とそれをとらえる詩人の眼の共通性は僕には興味深いものがある。

詩人にとってはその詩作品がすべてを語るものである。真の芸術家はおのれをさらけ出すことによって、よりすぐれた普遍性を持つものである。岡本潤は自伝「詩人の運命」の中で萩原恭次郎についてこう語っている。

（ベンが先走つたので逆もどりすることになるが、「赤と黒」出版以来の盟友萩原恭次郎は、アナキズム文芸誌「文芸解放」の分裂、解散（それを契機に壺井繁治や江森盛弥、高橋勝之らがマルクス主義陣営に移行した）後、一九二八年ごろ、東京の生活に見きりをつけて郷里の前橋市外石倉に定住していた。そこで「死刑宣告」時代の前衛的なデフォルマシオンとは作風の一変した、思想的にもフォルムとしても凝縮した「断片」の諸作を書き、その後はまた自分で原紙を切つて個人誌「ク

わが鋼の艦は行く。
夜を日につき
われら民族の血と運命を賭けて
海の闘ひは陸の闘ひにつづく。
わが少年の日の夢が
新しい世紀を創る。刻々の
壮烈な現実となつてかへつてきた。

（世界地図をみつめてゐると）

これが岡本潤の詩かと、自分の眼をうたがわずにはいられなかった。しかし僕は若い世代に属する吉本隆明や武井昭夫が、壺井繁治と同列に岡本潤を攻撃をした（前世代の詩人たち（文学者の戦後責任）等々のように戦後責任について、岡本潤を攻撃する事は出来ない。僕にはその資格がないからである。

それだけに武井昭夫の戦争責任の追求は僕には新鮮であり停滞気味の民主主義文学の運動に活を入れるものであると思つた。そしてその論旨は戦争責任は勿論だがそのことと結びついで戦後の文学運動の責任と言うか、その指導者として明日への展望について、ここに世代の交替が来ていることを痛感した。

そういつた意味では佐多稲子の戦後の文学は、戦争責任者としての生き方の追求課題を自分

と言つても急に新しいものがお互いに書けるものではないが、自分の内部の構造が変化を起して来たことを僕は感じていた。

岡本潤はきびしい戦争責任の追求に対してどう答えたか、たとえば「詩人の対立」などを書き、詩人としての戦争責任の問題を、「芸術運動の今日的課題」として花田清輝、吉本隆明と三人で座談会をやっているのが、昭和三十一年八月号の「現代詩」のついている。ここに岡本潤の考えがよく出ているように思えるので適当に抜き書きしてみる。

岡本 芸については花田君と同意見なんだが、平野謙君の発言の中で表現の責任ということを言つた点は、ぼくとしては共感するものがあったな。

花田 表現の責任についていつたのは、平野君ではなく奥野健男氏がいつたんです。吉本

氏の問題に關連して。

吉本 それはぼくが少し前に、『近代文学』でやった座談会で言ったんです。どうしてかといえ、原則的にそれをやらないと、文学者の詩人の戦争責任と、それとたとえば鶴見俊輔みたいな知識人の戦争責任というふうになっている。そうすると、その問題を探索していく場合に、きわめて無原則になっていく。だから、原則としてまず表現の責任を、書かれたものについての責任を……。

花田 それは物的証拠だよ。しかし、それは事実なんで、その事実に対する意味だね。その意味は、その表現の置かれた、表現された時代との関連を無視してはできないわけだ。

吉本 それはできないでしょう。しかし、なんかあるんじゃないでしょうか。表現というものがあって、その人の持っている問題をみんなあばくわけですよ。

岡本 その点では、太平洋戦争当時ぼくが戦争に協力したかどうかといえ、内心では協力していなかったといえるかもしれないが、しかし、書いたものの上で、少なくともぼくの意図としては、こういうふうに行けば、いくぶんレジスタンスになるだろうと思つたことも、書かれたものが客観的には協力の

形をとったという場合には、その責任は明らかに作者にある。そういう表現がどうしてなされたかということが、今日自他ともに、歴史的、科学的に追求されなければならぬのじゃないかと思つてます。そういう意味での表現の責任ということは、非常に重大だと思つてます。

ここで岡本潤の言っていることは、表現の責任の自覚がよく出ているが、それを歴史的科学的に追求なされなくてはならぬと言っていることに僕は避ける姿勢があるように思える。それを歴史的に科学的になされていなかつたことについての詩人の戦争責任の問題の重大さがそこにあつたのではないか。この座談会では花田清輝は岡本潤を守つてやろうと吉本隆明とかなり論争をやっている。

歴史的、科学的に、戦争協力の詩を書いたことを追求するといっても、戦後その詩人はどんな詩を書いて来たかそのことと深いかわりのあることを自らの課題となしえなかつたことを戦後の民主主義的な詩がかかえ込んでいた。その頃岡本潤はどんな詩を書いていたか。「動物行進譜」「エデンの島」「神の声」等々であつたことを僕はやはり武井、吉本の

追求をうけるべき裏打ちが、それこそ表現の責任として、そこにあつたように思うがどうだろうか。

一九五二年十二月号の『新日本文学』に「旅にて」——岡本潤に——という詩を書いている。この詩をなぜ僕が岡本潤に送るつもりで書いたのか、日本共産党のいわゆる五十年問題といわれる党内闘争の中で「人民文学」一派との闘いの中で同志としての岡本潤が僕の信頼の中にいたことを意味するものである。五十年の党内闘争で僕は除名された。それから僕は復党の話があつた、その時に党から自己批判しろと言われて、自己批判はお前の方がすべきだと突っぱねて、今日に至っているが、この時の中央の動きは今も僕には解らない点が多く、党外の人間として、中央における「人民文学」と「新日本文学」の統一の動きは、野合にすぎぬと放言している気持が今もある。岡本潤はその渦中であつて、いろいろと統一のために努力した。大変な苦勞があつただろうと推察された。コンミニストとしての岡本潤の「政治と文学」は大きな試練をその時うけたであろう。そのことは自伝に「詩人の運命」なんて題をつけたことが僕には、こ

れらの動きのなかでアナキストであつた岡本潤がコンミニストとしての苦闘の中で自分の運命的なものを感じたのではないかと思つて持ちから、「運命」なんてつけたようにも思える。組織の中の一ひとりとして、特に大きな混乱の渦中の人としての、どす黒き空気の中で、正しいと思う方向をめざして奮闘したのであろう岡本潤に僕の信頼は極めて強いものがあつた。

秋山清が、松川詩集とか死の灰詩集などの事件の詩について、その没個性な詩に対して痛烈な批判を加えたことは、民主主義的な詩に確かにプラスとなる批判であつた。それは戦争責任と戦後責任について、文学者としての姿勢と、また方法についても充分に聞くべき論点であつたが、その一方でそうした批判に答えるに、今まで数多く書かれていた事件の詩が影をひそめてしまったのに驚ろいた。

僕はこの社会状況の中で事件でない詩があるかと駄文を書いたが、岡本潤も自らの方法で、事件の詩を追求していた、もはやそれは僕や岡本潤の体質の如き頑張りであり、その次に来たのが「スターリン讃歌」で、そこで詩人の主体性を問われることとなつた。

僕はスターリン追悼の詩を書いたが、それが作者には無断でアンソロジー「スターリン讃歌」の中に「讃歌」となつて出ている。スターリン追悼の詩を「新日本文学」(一九五三年五月号)に壺井、岡本、小栗、吉田が書いたとき、秋山清がまた、現代詩の立場から事件の詩批評の一連の立論による批判をきびしく加えている。それは「文学として詩がこれでは駄目だ、というのにお前たちにはまだ解らんのか」という体のものであつた。

岡本潤にしても僕としても、コンミニストとして、スターリンの死について追悼の詩を書くことは、その時の必然的心情であつたが、書かれたものが類型的であり、本当の意味で追悼の詩となつていないことが問題であつたと思う。僕は秋山清の「これでは現代詩とはいいがたく、したがつてこの詩はスターリン的いやマルクス・レーニン主義的でない、ということにならないか」「リアリズムの不足ということに帰着する問題だろう」には参つた。観念的と言うことは、解らないことを知つたかぶりして書くことに通ずるものであろうことを知つたし、リアリズムというものについての認識を改めることになつた。

岡本潤にしても僕もスターリン追悼の詩を

書いたことで後にソ連においてスターリン批判がなされて、スターリン追悼の詩を書いた奴らは馬鹿の見本のようにいわれたが、追悼の詩になつていないと指摘されることに詩の問題があつて、スターリンの死についてあの時点で衝撃をうけなかつた日本のコンミニストとは一体何者かとの気持ちに僕には強い。権力と文学とのことがそこに出てくるわけがある。

いかに人間が生きる困難さ、政治のダイナミックな動きに引きまわされることか、日本のコンミニスト文学者が日本共産党の再度の党内闘争の中で今度は新日本文学会による黨員たちと決定的とも言える文学者としての闘争の中で政治の党派性と文学芸術における党派性とが、文学の自立のこととして現われてきて、岡本潤は、またまた党の民主化のため声明書の署名人として闘争の真只中で苦闘することになつたのである。

「真理と革命のために、党再建の第一歩をふみだそう」と意見書が付記されている声明書を岡本潤は僕に送つて来ている。一九六一年七月二十二日付のこの声明書の署名人は新日本文学会に所属する二十二名で安部公房、大西巨人、小林勝、武井昭夫、中野秀人、花田

清輝、野間宏、杉浦明平らの中に岡本潤も加っている。この署名人の中に五十年問題の頃「人民文学」に所属していた、野間宏、小林勝、杉浦明平らがいることは、この十年の間にその背景となる文学運動の方向が大きく転換して来ていることが解るし、この人達が日本共産党に向って批判の意見書を提出したことに意義深いものを感じた。

この党員文学者の声明に加わったことで岡本潤は除名される事になるが、政治、経済、文化らを含めて人民の立場からの批判、党員として階級的立場からの批判が何故にうけられず「除名」という組織的観念的な権力者の暴挙となってくるのか。また除名された者が人民の闘いに参加する場合、それを無責任な個人の活動と決めつける党的立場とはいかなる革命的責任を全人民の前に示すことか、党員文学者の声明に対してその内容を具体的に検討し、活動の指針を示したか。否である。実にむなしい組織論―規約の一方的な解釈の上に立つ断罪であり、階級的良心のかけらもない、自己防衛の姿を露呈しただけである。除名をうける岡本潤は、野間宏と党本部に向いて意見を述べることになったが、党員文学者の代表として岡本、野間はいかに苦難

に満ちた思いであっただろうか。

新日本文学会第十一回大会（一九六四年）には僕も出席したが、以上のようなことを背景として新日本文学会は日本共産党側からの攻撃に対して、民主的大衆文学団体として組織破壊の行動に対して全力をあげて闘った。僕はその頃の岡本潤の苦渋に満ちた表情を忘れることが出来ない。この大会はプロレタリア文学運動の時代から尾を引いていた政治と文学のことが戦後二十四年たってはじめて理論的にはつきりする方向が示されたのである。文学者にはその書くことに自らが責任を持つという当然なことがある。だが政党があやまった時、党員としてその方針に忠実に従って物を書いた場合、そのあやまりはどこかわけのわからぬところに押しやられ、その時になると何時も正しい党は、一部の者のあやまりとしてしまう。党の方針にそって、今からみると赤面するであろうことを書いたその党員たちは、その時は方針が間違っていたのだからという自己批判にもならない自己批判で事を済ませてしまう。これが文学者としての生き方であろうか。文学は文学者が自己の全体をかけて責任を持つことで確立されるので

ある。

こうしたことは岡本潤を論ずるに避けて通ることが出来ないことなのである。こうした波濤の真只中で岡本潤は生き、書き、そこに立っていたのである。岡本潤全詩集もやがて出版される、こうした時代の詩についてあらためて検討の対象になりうる筈である。

岡本潤の仕事のなかで僕は一九六四年に出版された、『こどもの詩が世界を変える』を高く評価したい。この本は子供の詩を検討しながら岡本潤は自らの詩観を表明している。この本を読むかぎりにおいては、従来のリアリズムの詩にアンチテーゼの問題を持っている。戦後の詩とアヴァンギャルドの展望がある。岡本潤の詩は直截であるが、この本の中では詩の方法としての屈折のこと、複眼で物をとらえることの必要が説かれている。僕はこの本には教えられるところが多かった。僕が出した詩集『わが射程』を贈呈した時に入院中の岡本潤から貰った手紙がある。

こちら御無沙汰しています。昨日、貴兄の『わが射程』を送っていただけ、まことにありがたく、さっそくむさぼるように読んでいます。「伊吹山暮情」には

ポスター

暮尾 淳

節目だらけの

板の囲いに

ストリップ劇場のヌードとならんで

赤いポスターが貼つてある。

躍る黒抜きは

「北方領土奪還」

その端から前のポスターが食出ている。

よくみると

その下からもまた下からも

西日を浴びてる

わずかな空地の

ひとつかみの枯れた雑草。

「空室有リマス」の

となりでは

オフセットの黄色を洗われ

赤がさめ

落選候補が

最後の青も褪せて

この世ならぬ顔で笑っている。

そんな彼と出会った夕刻の

空に

建築中のビルのクレーンが

にごった街の上で疎んでいる。

紙袋を抱え

少女が通り過ぎる。

葱の匂が残る。

じまり、戦中戦後にかけての長い貴兄の詩作の軌跡が他人事とは思えず胸に迫ってきます。

ぼくに宛てて書かれた「旅にて」などを讀むと、当時のぼくらの置かれた状況が昨日のこのように思い返されてなりません。

また、貴兄の詩集の中には「松川事件」について書かれた作品もいくつかありますね。そういうえば先日、あの事件で死刑の宣告を受けた本田昇君が、この病院へ訪ねてきてくれました。

あれからもう何十年かたっていますね。まったく思いがけないことで、当時まだ二十代だったと思う彼も、もう四十年配になって、いま新日本出版社で働いていると言っていました。当時のことなどいろいろと回想し、なつかしくいろいろと話合いました。ぼくは本田君が獄中で書いた日記風の詩を預っています。いま読み返してみても、彼の純情な強靱さがよくわかります。鈴木信君や加藤謙三君、杉浦君など、みな健在だそうですね。

——中略——

貴兄の詩集、これから何度も読み返したいと思います。ほんとうにありがとうございます。

ました。岐阜で貴兄の家一夜泊めてもらったことなども思い出しています。寺島珠雄君がよく便りをくれます。彼もなかなかよく仕事をしていますね。向井孝君などにお会いになったらよろしく伝えて下さい。

書きたいことはまだいろいろありますが、またのことにして、切に貴兄の御健勝をいのり、再会を期しています。

この手紙を書き写しながら僕は胸のつまる思いがこみあげてくる。一九七四年六月二日に僕は寺島珠雄、錦米次郎、清水清も一緒だったか、で富士見病院の入院中の岡本潤を見舞ったことがある。その頃も病状はあまり良くなかった様子だったがそれでも大変喜んでくれた。僕の手元に入院中の岡本潤と写した写真が一葉ある。

今年の二月二十六日中野重治を訪れて岡本潤のことを話した時に、中野さんが岡本潤が死ぬ二日程前に病院へ見舞いに行かれたことを聞いた。僕が行ったことを岡本は解ったようだと中野さんは言った。岡本潤は中野さんが見舞ってくれたことを最後の時にこころから喜んだことであつたらう。